

職場体験にチャレンジ! 一不登校を経験した高校生年齢の子どもたちの職場体験事業一

NPO 法人越谷らるご

団体の概要

NPO法人越谷らるご

○設立年月日：1992年2月（法人格取得2001年）

○所在地：越谷市千間台東1-2-1白石ビル2階

○事業内容

- ①フリースクール「りんごの木」
- ②20才以上の方の居場所「ほっとりんご」
- ③不登校・ひきこもりについての親の会、相談、学習会等の実施。
- ④自立援助ホーム「ゆらい」

フリースクール「りんごの木」の概況

○会員数：約40名。

（受け入れ対象：小学生～20歳くらいまで）

○開設日時：月・水～金 10:00 - 17:00

土 12:00-17:00

○りんごの木の特徴

1) りんごの木のルール

1. 自分のことは自分で決める。
2. みんなのことはみんなで決める。
3. みんなで決めたことはみんなを守る。

2) スタッフの関わり方

「先生」と「生徒」という関わりではなく、人と人としての対等な関わりを大切にしている。

職場体験活動の概要

事業実施の背景

- ① りんごの木に所属する10代後半の子どもの増加。
- ② アルバイト等の自立に向けた活動を希望していても、できない子どもへの支援の必要性
- ③ そもそも「働く」等の気持ちになれない子どもへの支援の必要性

活動のねらい

地域の団体や大学、企業、商店会などと協力し、地域での不登校の子どもの支援体制を作る。そうした中で不登校の子どもたちが主体的に職場体験をすることで、子どもたちが安心して地域で活動し、社会的自立をするきっかけ作りをしていく。

主な活動内容

- ① 運営協議会の開催（年3回）
- ② 「職場体験」実施と体験先の開拓
- ③ 「しごと」の話を聞く会開催
- ④ 「しごと」についての子どもたちによる座談会の開催

対象者

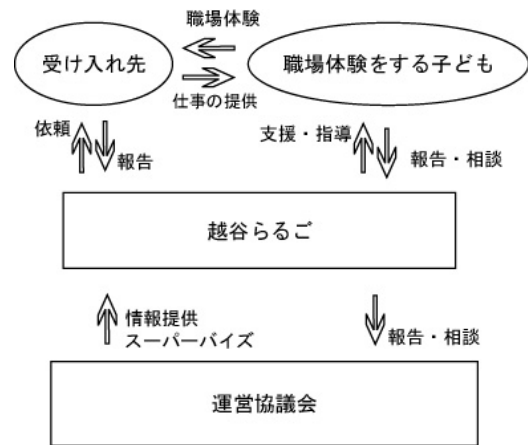
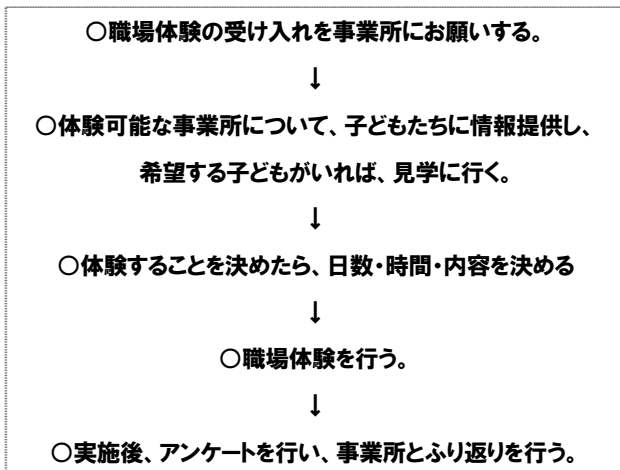
不登校や高校中退などを経験した高校生年齢のフリースクールに在籍する子どもたち（30名弱）

1 事業の内容等

① 運営協議会の開催（年3回）

協議会のメンバーには、大学教授、商工会、地域商店会会長、障害者就労センター所長、キャリアカウンセラーなど多種多彩な方にメンバーになっていただき、実施した。それぞれ違う立場から貴重な意見、提案をいただき、活動の大きなヒントになって実施できた。

② 「職場体験」実施



運営組織体制

受け入れ登録先(計 25 件)と実施件数(計 11 件)について

	業種	登録件数	実施件数
1	高齢者介護施設	3 件	1 件
2	障がいのある子ども施設	3 件	なし
3	飲食関係	3 件	5 件
4	その他 (楽器店)	1 件	1 件
5	(清掃業)	1 件	なし
6	(デザイン事務所)	1 件	1 件
7	(保育所)	11 件	1 件
8	(果樹園)	1 件	2 件
9	(美容院)	1 件	なし

職場体験をするかどうか、どこで体験するかは、子どもたちが自主的に決めている。そのため、子どもたちの関心の高い事業所に集中した。

また、体験時期も6~7月、1~3月に集中した。行事のない時期や仲間のだれかが一緒だと参加しやすくなっていた。内容や日数も個々の子どもに応じた形で実施した。

③ 「しごと」の話を聞く会開催(4回)

子どもたちにアンケートをとり、子どもが関心を持ちがちな仕事をしていて、不登校経験などがある人(消防士、うるし職人、ケーキ職人、まんが家)の話を聞く機会を設けた。職場体験しなかった子どもたちも参加した。

④ 「しごと」についての子どもたちによる座談会の開催

職場体験に参加した子どもたちの活動体験を共有し、振り返るための座談会を行った。人前で話すということに慣れていない子どもたちだが、全員が体験を話し、職場体験に参加した子どももしなかった子どもも経験談を共有できたことに大きな意味があった。またアルバイトを始めたが、なかなかうまくいかなかったことなども話題にあがり、「職場体験」に限らず「働くこと」について深いところで考えるきっかけとなった。

2 事業の特徴

① 子どもたちをいかにその気にさせるか

りんごの木の活動は「自分のことは自分で決める」が原則であるため、一律にさせることはせず、「体験」するかどうかは個々の子どもたちが決める。それゆえ、以下の3点が重要となった。

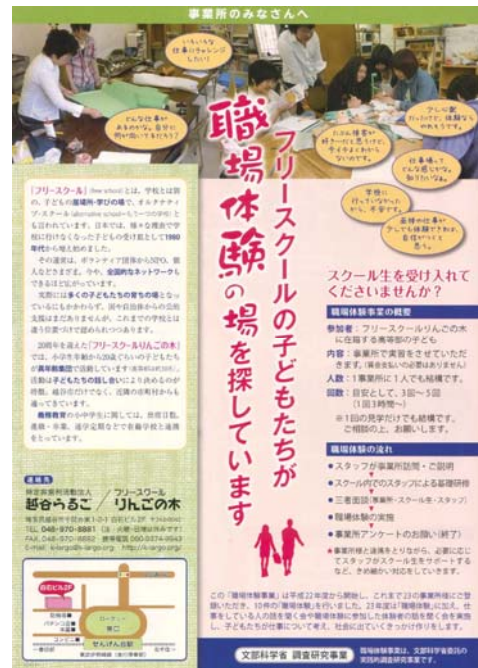
- 1) 子どもたちが体験したくなるような、興味をもち、魅力を感じる体験先を探し、分かりやすく伝える。
- 2) フリースクール全国ネットワーク主催の全国フェスティバル(合同文化祭)でゲームコーナーを実施したが、接客等を体験したことも働くことに興味をもたせる一つの手段となった。
- 3) 仕事やアルバイト等の話を、個々の状況を踏まえつつ、丁寧に行った。

② 地域の理解・協力を広める

子どもたちが日常関わる地域社会の協力を得ることが、活動において不可欠だが、地元商店会の協力を受けることができ、職場体験以外の活動にもつながりができた。

また協力をお願いする際、子どもたちの状況について丁寧に説明し、不登校の子どもたちへの理解を深めてもらうことができた。

不登校の子どもというだけで、話を聞いてもらえないケースもあったが、実際関わってみて、印象が変わった、という事業所もあった。



3 事業の成果

① 子どもたちの感想

以下は、子どもたちによる職場体験や座談会の感想である。子どもたちがそれぞれの状況で、仕事等について考え、言葉に出来たことの意義は大きかった。また体験した子どもが、受け入れ先の人と関わり、前向きな印象をもてたことのも意義もまた大きい。

- 職場体験先の方に美味しいものをいっぱいもらいました。嬉しかったです。(女子)
- ラーメン屋に行ったら思ったよりお店がきれいで、味もおいしかった。
- お店のおじさんがいい人だった。(男子)
- 職場体験に行った帰りに、みんなでしりとりをしたのが楽しかった。
今後やりたいことで言うと、接客は苦手だから、掃除とか裏方に興味がある。(男子)
- 自分が保育園に通っていたときは先生に甘えてたけど、自分が先生という立場をやってみたら、20人位いる生徒に甘えられたらすごく大変だと思った。でも楽しかったです。今後は自分でもやれそうなボランティアがあったらやってみたい(女子)
- 介護施設は一度行っておくと社会勉強になるから、みんな一度行ってみるといいですよ。(男子)
- 座談会でバイトの話が聞けてよかった。(女子)
- まだ仕事はしたくない。そうしたことを考えるのはだるいと思っている。(男子)
- 楽器屋での職場体験はやってみたいけど、今はいい。自分の気持ちに余裕ができればやってみる。(男子)

② 成果について

1) 受け入れ先について

25 件の事業所が体験先となった。分野についても多岐にわたっており、これまでの活動で職場体験先の数、種類はある程度確保でき、体制は整ったと言える。また体制を整えるにあたり、地域(例えば地元商店会)との関係が深くなったことも大きな成果と言える。

2)「職場体験」を実施した件数

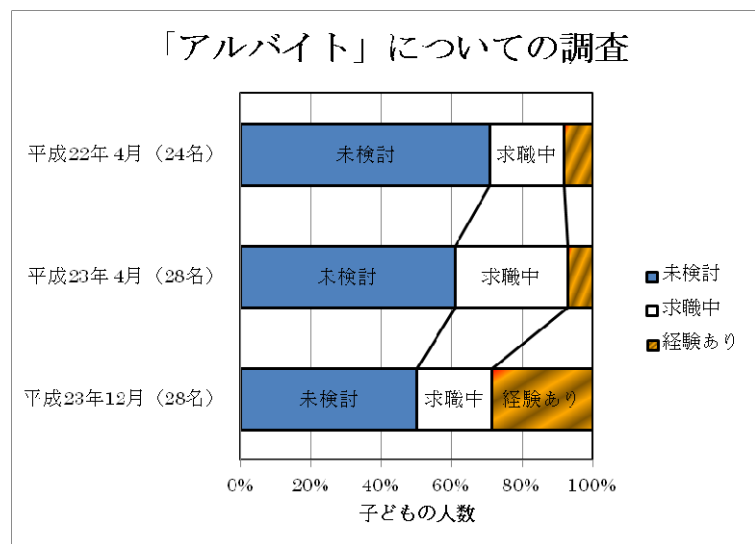
職場体験の実施件数は平成23年度が11件であった（対象者28名中）。りんごの木は、子どもたちの自主的な活動を大切にしているため、強制参加にはせず、希望者のみが参加して実施している。そうした中で11件は実績として意義がある。

3)「働く」ことへの意識の変化

この2年間の「職場体験事業」から社会的自立という点で子どもたちがどのように変化していったかを検証した。具体的には、アルバイトという観点で、「未検討」（＝まだ検討していない）、「求職中」（＝探している、探そうと思っている）「経験あり」（＝アルバイトをしている、もしくは経験をした）の3つにポイントを分けて、「働く」ことへの子どもたちの意識の変化を検証した。

その結果が下のグラフである。この職場体験事業が始まった平成22年4月では「未検討」が70%で圧倒的に多かったが、1年後、「未検討」の子どもが減り「求職中」の子どもが増えた。そして平成23年12月ではアルバイトを探していた子どもたちがアルバイトを見つけることができ、経験者が増えた。また、「未検討」の子どもたちがさらに減少し、アルバイトに向けて動き始めた。アルバイトを始めたりアルバイトを考えたりする子どもたちが増えた、という結果から、子どもたちが社会的自立の一步を踏み出したと言える。

※なお、在籍数とメンバーは多少変動しているが、少数だということで、このグラフ作成には考慮しなかった。



4 今後の方向性展望

○職場体験に限らない自立に向けた活動の必要性

平成22年度から開始したこの事業は、最初は慎重だった子どもたちの間でも浸透し、現在は抵抗感が少なく体験活動ができるようになってきている。またアルバイトを希望する子どもたちの数も増え、面接に行く等、積極的に動くケースが目立っている。

その一方でアルバイトや「働く」ということに目を向けられない子どもたちもいる。そうした子どもたちに対して、「職場体験」的な活動ではなく、子どもたちが無理なく関わること（例えばスクール内でできる作業など）を中心に取り組める活動の工夫が必要となる。

○受け入れ先との関係、体験内容について ～ win-win の関係を築けるように

体験先との関係は、一方的にお願いする関係だと長続きしないし、子どもたちにとってもよい体験にはなりにくい。子どもたちのことを応援しつつ、事業所にとっても受け入れることでメリットを見出せるような win-win の関係が作れることが理想的であり、そうした体験先のさらなる確保と関係を築きやすい体験の仕方を工夫していくことが重要となる。